





鷹百首和歌 西園寺相國家詠作

伊地知氏書冊



鷹山にわさぶうりては志をくは

代りつゝあゆまひけぬる

あふふと食を求む一切人言ふ

ワの所いさうはれのきかぬあひはみ

くあくのそりせういたるまふ

病者の世をさうせたる

いばるゝよゆきのさうはれをさる



ふれははなとよとていかに

遊世をいへば海はくちまも申すといふ  
云々ありきまことにいふ

あゝかゝる世にあらざるもの

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

在中に居るはれりる鷹乃

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ



鷹かりを思ひくぬるちりたれま  
つふものあき秋所記さうの

血をこれに注れぬぬぬかりのさうつ  
まろきたれし世やんまろぬ

はむ事秋もあふ心かこもむ

あふもまろき身あふ心かこもむ

あふもまろき身あふ心かこもむ

あふもまろき身あふ心かこもむ

あふもまろき身あふ心かこもむ

餌食ようきかいらんれんむ あり昔  
鷹りも紙とらする事日々あふ心かこもむ  
あふもまろき身あふ心かこもむ  
今とらつふに依る昔とらむ之餌食ようきを  
紙とらぬあり

弟山乃之縁とぬたの縁中すの縁

あふもまろき身あふ心かこもむ

弟山乃之縁とぬたの縁中すの縁  
てまろき身あふ心かこもむ  
あふもまろき身あふ心かこもむ  
あふもまろき身あふ心かこもむ  
あふもまろき身あふ心かこもむ



とくく鳥ははるけき野のこころに  
を後とくく鳥をまきまきしことし

法れ少く心はくく一は名鷹

確乃少少指ふよりそくそく

ちん

吾く心く心く地めりし道く

心はく心く帰る心く

鳥ハ心く鷹乃之乃く心く

心物心く心物を心く心く

うれく心く心く心く心く心く  
心く心く心く心く心く心く  
心く心く心く心く心く心く  
心く心く心く心く心く心く  
心く心く心く心く心く心く

物心く心く心く心く心く

心く心く心く心く心く

心く心く心く心く心く心く  
心く心く心く心く心く心く

心く心く心く心く心く心く



うしと月ならき所を移るぬ

餌食や人乃方遠下も又常とてとて  
おころりいりもや餌食ふをりあて  
りしとて改新山乃りしとてあひり  
たわねよしてかき女の許へりあて  
野(出)りしとて餌食をまゝりしとて  
にせぬ海の中侍てゆりりしとて  
をりよまげしとてあてりしとて  
つりしとて△乃きたりしとて  
餌食ふをりあてりしとて  
陸女(海)をりしとて

見なつとも長あをわつからふとて  
山をりしとて

あふくしとて  
羽衣をはきまゝに

同じくして  
うしとて  
とて

かきぬをりしとて  
地りしとて



七ノ多クは果ては... 此ノ山ノ... 鷹ノ... 喉を乞て序之...

鷹つふから種々 東乃止産志之流  
志之くくくくくくくくくく

明らといひたりまふりく 符香ぬ

あけの鷹乃あくくくくく  
あけのくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく

此の道は遠物之山ノ海ノ細中ノ流  
くくくくくくくくくくくくくく

たのまゆ子遠く山乃くくくく

くくくくくくくくくくくくくく  
肉たのくくくくくくくくくく  
肥くくくくくくくくくくくくく

たせじふ鷹くくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく



あまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ

あまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ  
あまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ

かうあまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ

あまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ

絵つらふ大娘かーふふあれて  
あまのきりやあまをてほくふたは

あまのきりやあまをてほくふたは  
たうほろまてもあれーかあ

餅袋あーあーあーあーあーあーあー  
あまのきりやあまをてほくふたは



穂川一ノ海を流るる山嶽小倉  
かき神より高き山嶽  
くらつと暮るる山嶽  
山嶽と暮るる山嶽

山口江 入神也中子とそは乃あ  
ら(世)も山嶽とそは乃神一を  
由り也くら津けと(や)し世

あつと暮るる山嶽  
くらつと暮るる山嶽

宇禮一也ねたひいと暮るる山嶽  
くらつと暮るる山嶽

山嶽と暮るる山嶽  
くらつと暮るる山嶽  
むら乃ちくらつと暮るる山嶽

山嶽と暮るる山嶽  
くらつと暮るる山嶽  
むら乃ちくらつと暮るる山嶽



峯に人をたまためて海鳥の羽を思ふ也  
鳥の羽はくも也

乃れ之ぬましれかればありれり  
かうつえなる山乃下す也

と云侍はそと空をそ也かり秋とそ  
うまにさる乃秋也さうい侍將乃登  
志保ふもて切之侍つこのゆきれ後  
そまかしくも也

鳥の身定野乃そくは侍将をふ  
しあ乃たう乃面まう思ふ

鷹濃負乃白きこり目のと林を  
あつちめとら乃海鳥をさうて侍  
んて面か秋とそ也

久しき侍と家も目ふりけりて  
物さしやそ海野のりり人  
鳥を思てさうりもなり

鳥の身もわゆる侍将を思ふ  
鳥の身も思ふ侍将の思ふも  
侍將の思ふも思ふ侍將の思ふも  
思ふ侍將の思ふも思ふ侍將の思ふも



見たりて喜りてととと

かりけりともくさる方もつしり  
人ともつし神一乃ふ急たり

言れ少るそに、飲乃者乃みそ  
得も乃たり、れもくありり利

百屋乃器乃乃ふ急たりと

竹野、きんやかり、聲乃乃と

日遠へ毎日鷹乃多を備除六并日片

野禁野田家也、河洞乃将往くは依く  
金、たより、御將より事成、禁よりあり  
又大和國宇田野も禁野と可き

目次之録、某とる、習れ少る、事、此、冬  
飲乃あ、く、は、あ、られ、ゆ、水

草とらとは、考れ、あ、ら、る、事、除、て、考  
と、思、え、考、く、て、考、乃、と、思、い、是、考、る、事、  
存、考、事、也、亦、草、此、歌、を、あ、り、利、て、之  
あ、り、り、考、れ、い、考、き、く、り、考、て、た、り、亦  
考、考、也、是、と、訓、考、と、も、考、か、考、ふ、事、考、ら  
考、ら、考、乃、あ、り、考、と、考、ら、考、ら、考、り



ともしついに朽たるの海鳥もあはれなく  
わらうつふはあまらうしん

春の鳥の味を嘗てみるは試みる心にて  
羽うんも身也はうに依てり鳥をうらむ也  
正徳をいふはかひなき成る事なり

さあさあ急かたうたう新刊わひて  
つれなき代り終そらうらふ

きりきり葉もらるる海鳥にこそせし  
そらうらうせつて又も朽れ

草花かしくそのひを居る者しては  
なりくくはとく小鳥の歌はうこそしを力  
あてきうして肝を空しくして胸の刺を  
こせ代わらうとあがりりや鳥は右乃眼に  
香いた乃眼なり肝はまふあを朽り小  
依くわらふ也とくは野にて雜りて葉  
をうらうしん

朽をよも鳥に終る一日をゆねと  
あうらうやめあうり人  
とふ鳥をほれもきあつるたかいめ  
うらわらうの海鳥うらうらうらう



ほあまといふいふ多也はく続といふたうに  
たうまといふいふくくれを成り多利  
とりの成りたりたりといふくくくく  
組なり利なりといふ多利は草草多利と  
はとも編て入る多利なりといふ多利  
こしりくも也といふくくくくくく  
いふ多利といふくくくくくく

物まらばはく後中何ふ小多を  
鷹くくくくくくくくくくく  
鷹くくくくくくくくくくく

たうくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

かひらひらふ志はくくくく  
うり枝あくくくくくく

たうくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく



所抄野「あゝふにん終極を枯り  
ゆつて、鳥乃草一かゝるも、

少終れ名海一そらうはあうら  
う回乃ふし中りかゝるも、

真柴

楢柴

夕雲桐弁あゝは鳴り利帰され  
はかいと終れとふあをせぬん

とうこいとい海鳥とり人多き

海也くさそをあきてかゝる又む終れ  
牙と付也

鷹ハ木長多うとあげよあらしを  
とらりけう終れ大のあまうし

たらしやーとてあーうらうは終れらる  
そああ長多うはうらうしーけみあ  
を海りくーああかゝるもあ  
ゆみあ終れ鳥は多きをうらうは利

多うらもやむい乃あまをいあーと  
あしりんてつるもあまをいりよ



後を何と云ふも其の縁に方形小ま  
り人色

利と利と利と利と小かこ一願  
りりしていぬる縁のたのむ時

皆あし鷹代のせし事つ  
たふつとてさる持ひぬ

乃せし魚くたわれ鷹代はし  
りんちうあそとひとて

鷹代乃きく利鷹とてりもさ  
けてと申ふとて鷹代とて利鷹  
將いふされよとありと申す利

所将人野これあり鷹山ノ利  
ありひくよとありては  
野は世い山とてあけくとも鷹代  
と魚とふきうは鷹代

をしち魚くそこと鳥とまこと  
さふ乃つり場乃言此明也乃



至し如野編ナカまゝが山人判

り何れに目にとまりぬる

若鷹は葛巻と書しむ録乃乞ふ事  
あつぬに或る處の書集乃まゝに刊

とけしなれらふ系物と書れぬ乃

書集一編し思存乃書風

あつぬと六集一乃書風

あつぬと書れぬ乃の書風

あつぬと書れぬ乃の書風

河村場と書れぬ乃の書風

あつぬと書れぬ乃の書風

たつぬと書れぬ乃の書風

河村場と書れぬ乃の書風

延喜河内野の書集は版わかれせん  
乃すむと書れぬ乃の書風

あつぬと書れぬ乃の書風

あつぬと書れぬ乃の書風



海峽の心から利の心から

くはれ所海峽の心から

海峽の心から  
海峽の心から  
海峽の心から  
海峽の心から  
海峽の心から

氷室の心から  
氷室の心から

海峽の心から

秋風と尾花乃心乃かきうつ

神領の心から

かきうつと馬の心から

夕暮れと林乃心乃かきうつ

かきうつと馬の心から

海峽の心から

昔かきうつと馬の心から

かきうつと馬の心から



一よりまたなり〜惣務にあらはれまた  
うけくじれたら山田乃からつち

一よりとい一度りもをさつて二度の  
さより二度も見たりなりたはるは  
若習を合申也朽たりとををたも  
こころからにはをほと大幸と成なる  
くふり合始をさり幸にあり  
とふさよりいふはをたとい合始  
よりよとを得く

これか〜い〜つ〜れ〜乃〜ある〜後  
た〜する〜す〜乃〜人〜を〜ま〜く〜ら

諸乃落船のねら何をも言れ下る  
むらり

若鷹浪東井をわく家かりとら毛  
た〜想〜い〜は〜向〜之〜林〜を〜す。

物らけよをや玉〜記妙節花  
た〜是〜も〜井〜邊〜の〜色〜こ

あ〜や〜に〜た〜ら〜も〜し〜も〜か〜け〜ら〜  
一ひ路に〜も〜く〜さ〜に〜記〜を〜は〜



しんがふといきらわはくふとくをせ

雲菴たの野々若海秋乃り衣

花より利くる好れ早こ乃り

此これ色いすりていさきし  
きり鷹乃利木の黒はいたたけ  
り

くろねまふまゆわかしくり湯

期多折ふましくりて

おらたまりあたらぬおはた

あつたふとく鈴そ

あつたふとく鈴そ

あつたふとく鈴そ

あつたふとく鈴そ

鳥子よりあつたふとく鈴そ  
乃りあつたふとく鈴そ  
奉くあつたふとく鈴そ

あつたふとく鈴そ

あつたふとく鈴そ







かゝるにありはるるは利

山麓もあつたにわたり

ふたつはあつたにわたり

あつたにわたりはるる

かゝるにありはるる

すなはちこれわたり

いぬき乃を成かゝるは  
となくはしてあつたにわたり  
はるるはるるはるる

あつたにわたりはるる  
はるるはるる

あつたにわたりはるる

あつたにわたりはるる

あつたにわたりはるる

あつたにわたりはるる

あつたにわたりはるる

あつたにわたりはるる



あまのこゝろとらむむしり

たゞれ乃行方候もそゆゑに  
うらもさうにほりてゆゑに  
ほろくとも地ぬすはつ  
ありてはれもたへ  
あゝとらむむしり

とりぬきもをさそとあひは  
格くもむしり

ゆゑにたれとそに花は終て通  
ゆりもをさそとあひは

そらも居はふも乃は利は  
年を之友候とて野はれ  
と格くもむしり

わらわていゝとすらんあ  
つれ乃もいゝとむしり

尻を平よ花入舞にほろく  
ほろくよいゝとむしり

のひらきあまのこゝろ







下る利なきしりりしとていふ事  
是を先け候乃後之終りもとていふ  
くはふしとていふ事なりしとていふ  
中をわく候のよれりしにていふ也

あさくは乃其あしとていふ事なり  
とていふ事なりしとていふ事なり

去路乃しあしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり

あしとていふ事なりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり

大乃鈴しりりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり

とていふ事なりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり

あしとていふ事なりしとていふ事なり  
あしとていふ事なりしとていふ事なり



鳥の林乃輕山鷹のり

去初々神の秋の花をり

若鷹法子の法らあをり

とつとつ想も面白れねや

あはれらまゝの願をきり  
らまゝくまゝくまゝの飛ぶは  
降る代わむ想中をさか  
ゆるねまゝの法らと云なり  
こゝにたつと半一七月十日  
雲の  
雲と明はして鷹乃多屋と出なり

故若鷹と云也又鶴と云字と若鷹  
と云は鷹乃也なり也



鷹之連新 二條殿御作

依係娘乃海弓也河のけの山はれ

依係いれの春去手乃若海弓を綱みしれ  
とらふと也つけい若海丸名也山云とけ  
葉を御て山を忘らふとつにまう之みこ  
ふいめくは海丸れい山をいふと云々

西原よりれい野に地と成りれ

まゝいふに言れ——鷹春はじ

白とく之又白海弓と云や白海弓はり  
見極傳と云

河弓乃河利海乃はくつらうん  
とりのあそとまゝいふに地をいふ  
まゝいふも言れいふも本野  
河事とす急海丸とらふも海丸ん  
野に海風乃地とらふもいふ  
たゝい乃山をらふもいふも雨

あーきくは海丸乃山と云云に



利にこれこそは事也

わしたりのいふことなむかひに  
きくもたらやとあつたぬを  
飛鳥海舟も然ら利つれて  
群一なる

と申す利かやとあつたぬを  
ういふことなむかひに  
とりこれあらむかひに  
てはにわたり

かゝ野をたよりたつたは  
いかにするを野の夕陽に  
あふむかひとあつたぬを

まじやうに日乃野をいかに  
あつたぬを切く多し  
はたか

桐喜乃水よりたつたのらなれ

あつたぬのらなれ

柳のそよよとあつたぬ



柳の蔭に夜を過す此の河津草之

とて海鳥を風吹かす終すは花散る

此の海鳥は西宮庭園の終いをもよほす、  
れはつをりつ終り

くまをねむはくまかり人

鷹ハガをよめをよめはつめはつめ

田妻一説 自啓鷹渡時政頼  
小竹ト云女ヲ出ニテ啓人ノ心ヲ  
迷ニテ鷹之事ヲ為知リケリ啓

人カエリテ後女恋テ死スル也亦或  
説政頼北山邊ニ女ヲ思ヒテキケル故也

をよめをよめをよめをよめ

とて海鳥を風吹かす終すは花散る

かりたるとりては名を白くす

きりては名を白くす

あつたをよめをよめをよめをよめ  
とて海鳥を風吹かす終すは花散る  
ほつれあふ声 鷹渡時をよめをよめ



くまのくにあつていづるは  
わたりてあつてあつてのり  
にまのあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

物なりあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

山城乃國少福古和國あつてあつて

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

七峯飛鳥ありあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて



うたはさういそとやの海客れ終りし

とらや一葉院所定権屋のそらとて  
遠西之又古名屋御きうをそらとて  
ふたり判

おひしきあか海屋とてきくひわり  
面をわくそらり海客れ少らとて海

うらとて中股乃先とて少ね判

野守濃か見え月雨のし海

野守乃くえんよ昔雄略天皇得  
と一なるふち海守海客れとれきり

これ野守を所定所きりくは野守  
長と地と海りて昔のらよ海客の  
れ方りし中りりいそ地と守りて  
中りりあらししそらとてふ有  
ちるに影うつるうし中りり

赤と地乃海客のいんかきうふりや  
赤海りひしりりあらしとて

海客れとて古名をみなかくてた  
とらとて古名を海客れとてまかぬとて  
とらとて古名を海客れとて一説  
とらとて古名を海客れとて一説  
とらとて古名を海客れとて一説



ひまわや〜鷹乃〜

鳥

〜庭乃〜

〜

〜

法利安〜

法利安〜

金銅錦〜

〜

半也〜

あま〜

小〜

所鷹人法師〜

か〜

留上〜

き〜

〜

〜



見れいん元白くしんてん也

吹よむ風を枯濃花を見て

さしきらしくゆく花をひ乃鷹

花野圃平賀と云所ふ方より鷹又  
と鷹かきしれく甚思わ一夜り所  
乃毛はし廊く融の流を二取て元  
れしに成をわ乃あつと云なり  
奥方の忠海とれ名は也

ららのくはあつと志乃ふを

鷹陽濃山乃道ゆめてこ

花相をい草にのころはあま

ころころの草し草を成かころ乃  
あ也亦一定乃草草一也

若々若きり流ゆめゆめ

神さしき月乃さあやうな

さ衣き乃色の若也肩しとをり  
ある気なり

さあれくころとたれ野あ

逢事乃あれなる中さうな



たりのうゝ似松と鷹乃うゝまじ  
山と松乃杉とや松と乃とまじ  
鷹と山と魚とを相乃はゆとまじ  
こゝも夜乃元いふちちよちか元也

常上行もたれ松乃音れと  
よちいあううの海乃乃ちうう  
可うう尾松をたう石打の元也  
音乃乃乃松く(やまを)んえとく  
ゆはうじまきとち海ううとん

あまのうじししはま松をたててかけ  
そあまをえとくも也

あまのうじししはま松をたててかけ  
そあまをえとくも也

たうもや床乃山風松あけく  
月も夜(う)乃海乃やまをたててか  
もあまのうじししはま松をたててか



さきく縄大巻乃らつたさく  
縄乃らう四十に終る

戸をさして松を思國とて  
うさうさや鷹も思松を好

なせ一度解ら残るのう利と

松原乃けし松葉集法花くさり  
志く流のた乃うれつら思

山と松原鳥鳴声やあつた思

此も毛乃たのう終あ

乃毛毛いし地いし母志終る  
のうあはく終るかうなる思也

武士れ駒乃りりみも終る  
なうとふしれ山野のまかり

百穀乃思濃執事沈うそかり  
たうはるあつ山麓したう

露乃思く神やなまの思終る



藤乃中一斗をこぼる藤乃新巻  
梅ふきくをこぼる

美利乃由き勝たたれしを  
古乃新乃の月あーしあえ  
きうとむとあまのこいひた

尾羽乞と江れの小ま居地家乃  
し縁あゆめしに節遠ふ中き  
まをまふまのね乃なりあを  
あね是日

僕乃ゆや人乃はまけとあま後  
毛乃居ねり

まらとまらとち古後とま後  
むつげとま後と

雲乃利もあれふのほりか井く

こい減の意りあけり成り居ふと  
あま

あつ瀬を鷹乃つこあま

こたの居り利



野々々々々々々々々々々々々々々々

年月日... 〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

年月日... 〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

九月廿五日... 〇〇〇〇〇〇〇〇

神の... 女乃鷹... 〇〇〇〇〇〇〇〇

福... 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

右此鷹百首者西園寺家  
之秘書也殘函年久令可



持仍慈雲院殿道雲爲  
風雅之御餌情梁感馳  
禿筆奉備尊說

明應四五月六日法印堯惠在判

丁 慶安五歲辰七月廿七日書之

一 鷹之生事横生之存生堅生之勝生地  
の赤と鶴生志不赤存事の因物也あゝま  
のまこといこれをいふは少存たうま  
ふらと四も好くさひのあゝまんあゝあ  
まの慶梅白と云尾好乃生らるる白  
言白ト云とくあまのまはまのま  
毛白あり——いとおまのま  
一 存事養存所とあり存事  
乱頭申又い髪口の毛を鼻毛乃事



呀門ヲトカイと云く鑿也。眇門ミョウとは目能なり。眼門ガンとは  
眼也。脣果ツツミ毛隠毛カクレカとは胸乃事之重乾オモシ  
といふ。雲の毛雨處を乾處又云珍押毛ツツミ  
云鈴板れとの毛也。此内切も有り。御對毛ミタガヒ  
股乃毛也。毛落き成りしに結の毛と  
款乃毛也。刺毛サシカとは羽ハ乃下股ノシタより  
毛也。翡翠翠れ毛ハクと胸乃毛也。白毛シロカあるを  
鶴毛ツルカと云。授衣毛ツケカ又礼糸レヒと云。凡毛ツバカは  
毛也。吳張コノハの毛又帷毛ツツミとも云。上毛ウヘカは毛也。

脰ノドと毛とは小臂毛也。ちりきと云ふは  
髪毛カミカといふ羽ハ鼻先ハナノサキよりこころの形カタも少ね也。  
はねりねの形カタも生る代トコロ理果ツツミと云。

一 菓クサ毛カは濃籠ツツミ解トクれ付ツケ初ハジメと毛カ乃生るを  
毛カのり毛カむカ毛カ長ナガ後ノチはハ毛カ尻シラの  
毛カと云。花ハナ一ヒト生ナ二ニ生ナ及ツキ毛カと云。知チ毛カ  
火ヒ鬚ヒゲ角ツノ鬚ヒゲ乃ハ別ワカる毛カ付ツケ毛カ平ヒラ代トコロ  
角ツノ鬚ヒゲ毛カと云。毛カ籠ツツミはハ毛カ母ハハ毛カ包ツツミの  
皮カ也。毛カへハ一ヒト蚊カ也。毛カ心ココロ也。好ヨシ襟エダ毛カと云。



了哉切とれい少驚成細くふきくきく  
く魚く少あ何ふらにーににせん  
せい龍乃中大架をさ所一

一 驚成むる事一 せい方なれ骨くしとれ  
元と蛤身とさ海と服と半舟と  
若ふ入き海かえと足はくく一額  
と度くれとさきく丸く胸い出えよ加  
かひと下とくらくくさくしとあは管い  
厚くれ腰とさくしと厚くれ

むらうゆい所とさけり海とせりとを  
かとせす絲とさくしとれりくしとれ  
廻ら蓋とさくしと末りそとれねえ  
らきれふらとさくしとさくしとさくし  
ひけ後から山にけり海前には少と  
をさけらとさくしと色いたたぬき成  
と成せとさくしとさくしとさくしとさ  
乱ひと針とさくしと眼のよとさくしと  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく



洗気ハ七乃胆を煮くして乱糸以糸  
をこし一室を小石を骨をこす

一鷹を小膽之湯也肝の膽りつく湯減  
きん乃ふとふまらん乃そくにはふ  
とハそくをれふト云腎の膽りつく  
湯をんそくをの湯と云なりそく  
をそくれ湯ハこのふとまそくを湯は  
小膽之湯也肝を煮くは腎乃  
膽のこくをそく乃そくハそくをこす

袋ともし也物るらそくを煮くは腎  
し糸小胆をりそくむ糸をりけそ  
おそくハこく也糸をこくハ下  
胆をのふくと胆小色くハ湯ハそく  
おそくをこくハ糸を小膽をわくハ通  
そく也胆をこくハ糸をこくハ糸を  
おそくをこくハ糸をこくハ糸を  
いそくをこくハ糸をこくハ糸を  
いそくをこくハ糸をこくハ糸を  
いそくをこくハ糸をこくハ糸を



修氣をさくしむ也徳神に奉成お  
うふ所何ほしむく味ひ見ふ物成ふ  
に格情多也味乃平なり物必ハ成る  
とらハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
毒とならん

一 韓カニクニ卷クニとハ茶チ鷹トウのノ吳ウ名ナ也ヤ吏リ相サウ相サウ也ヤ  
カウサウ

一 黃クワウ解ハクこのノ乃ノ者シヤ也ヤ又マタ 金キン飽キョ

コソリ  
麻マ子シ容ヨウ者シヤ也ヤ

一 決ケツ雲ウン見ケンこノはハ一ヒトハハ吳ウ名ナ也ヤ

私曰蒙求  
晨風鳴北林

一 晨シン風フウ阜フ乃ノ吳ウ名ナ也ヤ又マタ曰イハレ祝シユ也ヤ

一 牽ケン黃ウいハ乃ノ吳ウ名ナ也ヤ又マタ曰イハレ祝シユ也ヤ  
クワウジ



鷹名所之事

一 まるく園あり 十んまうと云

一 青いきん玉あり くらんと云

一 天竺あり きん鳥と云

一 鷹あり 志んくは海鳥と云

一 鷹あり 鷹と云也

一 日本より鷹はくい神と事 仁徳天皇

之所代仁徳出頂未有年号如何不審合連圖四十二年元年之つの元申

帝遊獵放鷹捕雉 甲寅也 仁徳八十七主ノ三十七世孝徳比追ラ大化トの年申の日は己始年号スきる夜鳥の事

今小甲ノ日を去日也

一 昇園鷹之屋名

鷹之名ヲクワニシヤトカケハ  
上ハセキ下ハ出入トヨミモ有  
ナリ是ニヨツテ鷹生ニセキ  
ユクニヨナキヤ京極殿御家

鷹師

鷹座スユル

責セ子コ



一翼モト一足ク一座カ一架ホコ一枷カ

黃鷹ワカ撫鷹カヘリ白撫鷹モロカヘリ

一歲為黃鷹ト

二歲為鶺鴒鷹ニ

三歲為青鷹サイチウ又曰三歲鶺鴒鷹サウヨウ也

山迴 三歲之取也

狩 春 蒐 夏 畋 秋 獵 冬

角鷹ツノ執鷹ツノ母鷹ツノ

弟鷹ニ姉鷹メ兄鷹ケイ

男鷹オ棲シ兄隼ケイ執鳥ツ鷓シ

社鳥シヤ鷄ケイ隼ツ鷓シ鷓シ

祝鳩シウキウ晨風アサカゼ伊イ鷓シ

一 穿鷓クワイケツハマフサ 兄鷓ケイハマフサノセト



一 鷗ウ

摩マ兄イ

鷓シ

小男コナノ

鷹トウ

金飽キンボウ

差隼サシハ

刺羽シハ

雀隼セウ

决ケツ雲ウン兕シ  
サシハノ異名

一 鷲ウ

鷓シ

雀鷹セウ

鷓シ

菩提雀ブツセウ

紫鷹シホトウ

紫隼シホ

枇杷ヒナ生ナ

桃花鷹ヒナ

蒼鷹ソウトウ

黃脰ワウ

若鷹ノ異名 大小共ニ

一 鷹トウ平ヘイ

江エ鷹トウ

鷹トウ解ゲ

鷹トウ袋サイ

志シ隼ハ

志シ隼ハ

鷲ウ

鷹トウ格カク

决ケツ

鞆タヌ

者シヤ羽ウ

鷹トウ職シヨク

繫ケイ隼ハ

鷲ウ

癢イタ

換カヘ

鷹トウ

繫ケイ

牽ケン

脚ケツ統トウ

敵テキ

縛バク

竹タケ捲マキ

元ゲン助シュ



旋子 ワ

タナシ

竹 エナキ

糊 カ

艶花 ヒサシハナ

小撲 コツチ

尾魁 ヒクワイ

多助 タス

肖像 セマウゾウ

鳴物 ナラモノ

石打 イシウチ

芝川 シバガハ

急机 イサキ

鳥居 トリイ

瑞子 ミズメ

瑞福 ミズフク

噯 カム

掛 トリモチ

那 ナ

綾 アヤ

翔 カケル

叫 アケル

噤 ヒク

潤 ツル

鎗 キツエカヘス

澤 カヘルケ

刷 シラ

一挾 イツケツ

一竿 イツサン

齋懐 サイカヅ

宿山 トモヤマ

停山 トモヤマ

机 ツクリ

肌 ツクリ

瘦 スガ

犬一牙 イヌイツガ

錠子 モトフシ

率 ケニクワ

大 オホ

燕 ツバメ

離 ヒナカタ

叫 ケル

看 ミル

黄耳 クワウミ

扣 タキエ

拳 アケエ

正 マサ

蒸 ムシ



洗<sup>シ</sup>煉<sup>レン</sup>

再<sup>シ</sup>辨<sup>ベ</sup>煉<sup>レン</sup>

横<sup>ヒ</sup>易<sup>イ</sup>

雜<sup>ワ</sup>摸<sup>モ</sup>

雞<sup>カ</sup>耳<sup>ニ</sup>

決<sup>ケ</sup>捨<sup>セ</sup>

多<sup>タ</sup>起<sup>キ</sup>

瘦<sup>ソウ</sup>

喰<sup>ク</sup>鳥<sup>トリ</sup>

已<sup>イ</sup>

鳥<sup>トリ</sup>提<sup>テイ</sup>

後<sup>コ</sup>尻<sup>シラ</sup>

多<sup>タ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>投<sup>テウ</sup>

揚<sup>ヤウ</sup>上<sup>ジョウ</sup>

求<sup>ク</sup>

合<sup>カウ</sup>虎<sup>ユトリ</sup>鳥<sup>トリ</sup>

同<sup>ドウ</sup>虎<sup>コ</sup>鳥<sup>トリ</sup>

座<sup>ザ</sup>拳<sup>ケン</sup>

逸<sup>イツ</sup>犬<sup>ケン</sup>

完<sup>カン</sup>

鴿<sup>カ</sup>

羽<sup>ウ</sup>

存<sup>ソン</sup>矢<sup>ヤ</sup>放<sup>ホウ</sup>

辰<sup>チン</sup>木<sup>モク</sup>

雄<sup>ユウ</sup>

雌<sup>スイ</sup>

狎<sup>ナ</sup>

馴<sup>ジュン</sup>

卵<sup>ラン</sup>破<sup>パ</sup>

臂<sup>ヒ</sup>鷹<sup>ヨウ</sup>

野<sup>ヤ</sup>鷹<sup>ヨウ</sup>

馬<sup>バ</sup>駿<sup>ジュン</sup>

鳥<sup>トリ</sup>捕<sup>ポ</sup>

一<sup>イツ</sup>奇<sup>キ</sup>響<sup>ヨウ</sup>

鳥<sup>トリ</sup>怪<sup>ガイ</sup>

斛<sup>コク</sup>柄<sup>ヘイ</sup>

川<sup>セン</sup>流<sup>リウ</sup>多<sup>タ</sup>

走<sup>ソウ</sup>斛<sup>コク</sup>

衡<sup>コウ</sup>

冠<sup>クワン</sup>

鴉<sup>ヤ</sup>

決<sup>ケツ</sup>十<sup>ジュウ</sup>

拾<sup>シツ</sup>是<sup>シ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>書<sup>ショ</sup>也<sup>ヤ</sup>

一 崔<sup>ツイ</sup>法<sup>ホウ</sup>高<sup>コウ</sup>御<sup>ゴ</sup>史<sup>シ</sup>語<sup>ゴ</sup>曰<sup>イハレ</sup>左<sup>サ</sup>南<sup>ナン</sup>



鳥ス 鶴コウ 有レ 北 鳥ス 鷹コウ 催馬樂

一 鷹コウ 乃 斬レ 見ト 云 事ハ 口 斬レ 乃 下レ  
河 知 河 乃 寸 急ク 斬 乃 下 乃 急ク 鷹  
志 目 也 見 乃 北 南 方 乃 同 農 内  
同 一 乃 乃 乃 是 口 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
田 別 亦 亦 乃 必 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 得 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃

は 一 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

は 一 乃 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

大 乃 一 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

み 乃 乃 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

乃 乃 乃

一 鷹コウ 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃



一 虎志生乃石

大屋形虎

小屋形虎

多絲形虎

志の比虎

志と虎

マセ虎

マシ虎

河か生

但身極有口傳

一角鷹ヲキユエハ三声 兄鷹五声

或ハ四声ニテモ不苦

一 鴈鶴 ナトニクマサルニ 五八草

耳カキニ半分程餌ニツ、ミ飼ヘシ  
但鷹キツクナルニ

一 増ヲトニ赤大之糞生ニテ妙也

一 息胴氣ニアルゾブ妙也常ニモ吉也

一 急ニスカミタキ取蓬モミ餌ニツ、ミ

可飼角鷹ニハ大マノニツ程用エ小

鷹リレウニ可有分別但ニ腹中

不可然

一 真竹ニ節ヲコメテ聖隱ノ糶中エ



寒三十日漬其後流川ニ七日漬  
サテ一日日曝サテ打破見シハ水有  
之此タマリタル水ヲムキ水ニ可用息  
胴氣又ハ春鷹タケリ下ニ其外諸  
病ニ可也

伊而相傳諸病ニ吉息タケル可用

一人參 川芎 太黃 寂胡

右各等分粉ニ水ニタテカフ熱氣ツヨキハ  
カイコヲ多ク遣

一 フルセアサ ニタ キリニケツ ニタ 霜

一 丑チアイニ 耳草ヲ加

一 息ノヒツムナトニ 童ノ小便ニヒタシ用ユニ切ニ切程  
ヌラシカフ

一 鶴ハ男女兎鷹ハ女子何モ未食ニ三歳ノ小便吉ニ

一 虫ヲユリタツ子ニ口ナメツリヲスル  
ナリ是ニ丑スハリニ可灸惣而カナフ  
ク口ヲ灸ニテモ丑スハリヲ一ニ數可灸



右此一冊者雖爲祕事  
今書寫早努々不可有  
外見者也

根井新兵衛

高知

同 勘七郎

高忠



